

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.212

ISSN 2432-5295

特集

アート

C O N T E N T

◆ 特集【アート】…01

- ・「糸島国際芸術祭 2018 糸島芸能～マレビトの通り道」鑑賞記…02
- ・映画祭に行こう!…03
- ・時空を共有し生き続けるアート…03
- ・最高の芸術 一人を生かす家訓・社訓…04
- ・日韓の大学生がマンガで異文化交流!…04

◆ 今、こんな仕事しています…05～07

- ◆ 視察報告…08
- ◆ 近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆ まちかど…裏表紙
- ・坂のまち長崎を訪ねて～傾斜地での暮らしから考える～



特集 アート

アートには新しい驚きがあります。それは私たちの魂を刺激するものです。頭で考えるのではなく身体で、そして魂で感じるもの、それがアートなのではないでしょうか。

まちづくりの世界でもアートをテーマにした取組が増えました。アートをファッションとして捉えたり、単なる集客のツールとして使っている例も中にはありますが、魂を揺さぶるような創造的な取組に出会いたいものです。

わたしたちが関わるまちづくりも、地域課題への対応という「ソリューション」から、新たな価値を生み出す「アート」の領域へと踏み込むことを目指したいと思います。そのためには日々、センスを磨くこと。本物のアートに触れる機会を大切にしたいです。

編集委員会

表紙写真：誰もいなくなった廃墟にはどこかアートな雰囲気が漂う。
(長崎・軍艦島／撮影 坂井信行)



「糸島国際芸術祭2018糸島芸農」マレビトの通り道」鑑賞記



中西美穂

アートマネジメント研究
大阪アーツカウンシル統括責任者



山の麓にある神社の本殿で演奏された「イナリかぶら」は変な音楽だ。音楽家の河合拓始と地域の女性や子どもら6名が、「よ〜っ」とか「え〜っ」とか、鼓を打つ囃子方のような声を出し、山や神社、人々の中にいる「小さな神々」を呼び起こし、小枝や手拍子で奏でるリズムのもとに集める。風のざわめきや遠くに走りゆく車の音が混じるのも楽しい。

同じ本殿の天井や、炊事場やトイレ（芸術祭を記念して奉納されたそう）横の板間には、陳佳慧によるパンの彫刻や、廣末勝己による抽象画、遠藤文裕によるドローイング絵巻、そして、この芸術祭の代表である松崎宏史が率いるStudio Kuraの



Studio Kura 外観

手作りハンコをつかった参加型タブローが展示されている。境内には、子どもたちの作品、地元食材をつかったフードマルシェ、裏山にもインスタレーション作品がある。2018年10月後半の週末4日間、福岡県糸島市二丈松末地区と深江地区のアーティストや神

社、民家等で、国内外の24名と3組のアーティストらが参加し、展示やパフォーマンス、トークや作品上映、マルシェがある「糸島国際芸術祭2018」が開催された。福岡市内から電車で約45分、入場料千円。鑑賞者は集落や田んぼの中を散策しながら展示会場を移動する。

代表者の松崎氏に「芸術祭」の成り立ちを聞いてみた。「芸術祭」は2012年から2年に1度開催し今年で4回目。そもその発端は、美術を学んでいた松崎氏が交換留学生としてベルリンに滞在したことだという。留学期間後もヨーロッパのアーティスティックレジデンスなどを渡り歩きながら世界のアーティストと交流を深めた。知り合ったアーティストから日本のアーティスティックレジデンスに行きたいと乞われ、糸島にある実家の米蔵をアートスタジオに改装し、彼らを受け入れ始めた。それがStudio Kuraの始まりである。近隣の空き家もスタジオに改装し、現在は第3レジデンスまであり、年間約80名ものアーティストを海外から受け入れている。その活動の中から、アーツファームを構想した。日本語に直訳すれば「芸農」だ。農業のように、アートを育てて収穫し、それによって土壌

が循環するイメージ。賛同するアーティストらが「糸島芸農」の仲間であり、「芸術祭」を運営する。地元福岡やStudio Kura滞在アーティストに加えて、3・11を機に東京から糸島に移住した人や、九州大学でアートマネジメントに関わる人も加わる。芸術祭運営スキルに事欠かない体制に思えるが、かつちりとは運営していない。今年は、事務作業が追い付かないのではないかと思いつき、成金も取らなかったという。運営資金の一部は関係者が持ち込んだアート系お宝のオークションで補てんを試みた。受付などは「いっきさん」と名付けられたボランティアチームをお願いした。作品の搬出入はアーティスト本人が、ウェブサイトなどの広報は賛同者ができる範囲で行う。観光目的の大量集客はないが、東京や関西、沖縄からもアート関係者が視察に来て、居心地よく過ごしている。

民家の倉庫にインスタレーション作品を発表している渭東節江は大阪出身。東京在住の8年間を経て、現在は福岡市内に暮らす。前回の2016年から参加した。ここでの展示は、作品販売もなく、謝礼もなく、有名キュレーターへのプレゼンテーションがあるわけでもない。では、アーティストとして何が目的なのか。「芸術祭」で作品発表をしているのか。渭東は「見てもらうこと」が何よりのモチベーションなのだという。さらに「壮大な目標だけど」と前置き

しつつ「この作品を見た人が、見た人なりの、自分の考えを持つ過程を経験して欲しい。世の中が複雑になり、よくわからないことが少なくない。選挙で誰に入れるべきか、迷うこともある。アートは自分なりの考えを持つ練習になると思う。作品について説明するが、それをそのまま理解して欲しいのではなく、私の説明をきっかけに、あるいは見た印象のままに、その人自身の考えを持つてほしい。自分なりの考えを持つ過程が、世の中のわからないことをも考えるための練習になればいい」。

渭東の言葉を借りるならば、アートは人々から「考え」を引き出すものである。あの変な音楽は、人々から「小さな神々」を呼び出していた。アートは人々から何かを引き出した、呼び出したるもののようなのだ。そんなアートな、現代美術や音楽ももしかしたらマルシェも！が、育まれ、収穫されることが繰り返される土壌、それが糸島国際芸術祭なのだろう。次回は2020年、また行ってみるつもりだ。

参考：糸島国際芸術祭ホームページ
<https://www.ito-artsfarm.com/>



渭東節江《塩を編む》展示風景



映画祭に行こう！



長沢弘樹

サスティナビリティマネジメントグループ



芸術作品そのものではなく、その制作や接触によって起きる化学的反応にターゲットを当てるのが今回の特集「アート」の趣旨になります。映画がアートか？という間に眼を瞑った上でいうと、「アート」のそうした一面を最も手軽に、手近に体験できるのが映画祭です。

映画祭にはいろいろな種類がありますが、コンペティションがあつて、上映作品を公募し、グランプリを選ぶというプロセスを持つ映画祭が「王道」です。京都の映画祭でいうと、京都国際映画祭のクリエイターズファクトリー（C・F）や京都学生映画祭など。同じ作品が複数の映画祭で賞を取ることも多く、昨年のC・Fグランプリの「カランコエの花」は10以上の映画祭で賞を取っています。また、作品を募集、審査、上映し、さらに監督等と呼んでティーチインまで実施するのはとても大変なので、作品を公募せずに実行委員会が選定する映画祭もたくさんあります。

それでも多くの映画祭には共通するものがあります。それは祭りの持つ華やかさであり、選定される映画で作られる多様性と奥深さです。その全てを兼ね備えるところが、映画祭が「アート」である理由です。

映画を見る手段は多様化し、い



つでもどこでも見られるようになりました。ただ映画館でもテレビでも、自分で選ぶ限りは似た作品ばかりになりがちです。映画祭はそうした日常を少し脱線し、非日常の世界に足を踏み入れるためにあります。予め気に入った作品だけ見て帰るのではなく、ついでに普段は見えないような作品をもう1つ、いや2つ見るのが映画祭の正しい楽しみ方です。

ついでに見た映画が気に入れば、そこから新たな世界が広がります。そうでない場合も、なぜこの（つまらない）作品が上映作品に選ばれたのかと考えることは、自らを未知のステージに誘います。考えても理解できず（よくあります）、自らの思索の限界を感じたとしても、その経験こそが「アート」の実践に他なりません。

見るだけで人生が変わるかもしれない映画祭。探せば色々なところで開催されていますので、ぜひ足を運んでみてください。

時空を共有し生き続けるアート



岡崎まり

地域再生デザイングループ



私のスロベニアの記事を読んで三輪名誉会長の学友である彫刻家の藤本春記さんからご連絡を頂いたのは7月頃でした。

藤本さんはスロベニアの第2の都市マリボル（Maribor）で1983年に国際彫刻シンポジウムがあり、1ヶ月滞在し作品を制作したそうです。その後、旧ユーゴスラビアでは内戦があり、作品が現存しているかということでした。

国際彫刻シンポジウムは、オーストリアの彫刻家カール・プラントルによって1959年ウィーン郊外のサンクト・マルガレーテンで開催された「欧州彫刻家シンポジウム」が発端となって世界に普及したもので



藤本さんの作品「スパイラル」

す。国際的な彫刻家たちが一定期間、創作の場や寝食を共にしながら作品を制作します。旧ユーゴスラビアでも1960〜80年代にかけて開催され、日本人が初めて参加した国際彫刻シンポジウムでした。

今回、藤本さんの作品を確認するためにマリボルに行ってみると、現在はサイクリングコースのランドマークの1つになっており、コース内にはその他にも日本人が手がけた作品が点在していました。

公園やニュータウンの近隣センターなど設置されている場所は異なりますが、コンクリート等で制作された巨大なオブジェであるにも関わらず、その場に溶け込み、住んでいる人々の生活によく馴染んでいました。地域で暮らしながら制作することで、地域の特性を深く読み取ることができ、地域に長く愛され続ける作品になるのだと思いました。

国際彫刻シンポジウムの理念としてカール・プラントルが「作品は、時間と空間を共有しなければならない。そして、その場に根をはり、生きつづければならない。」と述べていますが、まさにそれを体現しています。



最高の芸術—一人を生かす家訓・社訓



三輪泰司
名誉会長



我が家には、明治の初めに成文化された「家訓」が伝わっています。

その第三条は「家の子は宝、慈しみ育むべし」といいます。昔、祖父に「家の子ってなに？」と聞きました。子どもたちだけでなく、番頭・丁稚、別家（元従業員）、取引先全部だそうです。

祖父は味噌屋のアルジですが、学務委員（今のPTA委員？）も勤めて、「人を育てるのは、最高の芸術や」と言っていました。実際、「夜学」と称して丁稚たちに読み書きソロバンから論語まで教えていました。

家訓や社訓は憲法と同じで、子弟や社員を縛るのではなく、アルジや経営者が何をすべきかを示す心得なのです。トップは何をせんといかんか、自分で見つけ、身をもって範を示すことやというのです。

では「育てられる方の心得は」と聞きました。「高い山ほど裾野は広い。富士山を見てみなさい」。十代・二十代は一合目・二合目、裾野には



祖父母の隠居からもらってきた織部灯籠

いろんな登り道がある。好きなことをやれ。失敗しても誰かが援けてくれる。三十代・四十代は六合目・八合目。だんだん狭まってくる。可能性が減ってくる。自分で責任とらんといかんようになる。頂上になると、なんと、全く違っていった道が繋がってくる。富士山には、九回登ってみました。

とは言っても憲法も家訓も、言うは易しく行うは難し。不断の努力が必要で。

わが家には「家訓」を思い起こす実体があります。毎朝、祖父母の隠居からもらってきた織部灯籠に灯明をあげるのです。アルパックの経営者として何をすべきか。「社訓」のつもりにしてきたのは、中小企業家同友会のホームページにある「労使見解」です。経営者・労働者の葛藤を超えて到達した「人を生かす経営」の思想です。

日韓の大学生がマンガで異文化交流！



江藤慎介

地域産業イノベーショングループ



「東アジア文化都市」は、日中韓3か国において都市を選定し、様々な文化芸術イベント等を実施することで、東アジア域内の相互理解・連帯感の形成を促進するものです。

2017年は京都市が選定され、中国・長沙市、韓国・大邱市と交流してきました。引き続き2018年も交流事業を実施しています。

このうち、アルパックは京都市で実施された青少年交流事業をお手伝いしました。京都市で文化芸術を学ぶ大学生7名と、大邱広域市で文化芸術を学ぶ大学生6名が夏休みの4日間、京都の暮らしの文化に触れながら交流を行う内容です。京都の文化を「暮らしの文化」「伝統芸能」「伝統産業」の3つの切り口で



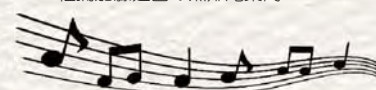
写真：上 マンガの描き方レクチャー
下 京都の文化を縦スクロール漫画で表現

と「縦スクロール漫画ワークショップ」を考案し、事前レクチャーやグループワーク指導を行いました。マンガを描いたことがない大学生もいましたが、さすが芸術系。僅かな時間で手描きの縦スクロール漫画を完成させ、京都の暮らしを見事に表現していました。

また、交流事業の成果として、日韓混成によるグループワークに取り組みました。発表手法は文化芸術を学ぶ大学生に相応しい「マンガ」。アルパックに在籍する漫画家志望の社員と「縦スクロール漫画ワークショップ」を考案し、事前レクチャーやグループワーク指導を行いました。マンガを描いたことがない大学生もいましたが、さすが芸術系。僅かな時間で手描きの縦スクロール漫画を完成させ、京都の暮らしを見事に表現していました。



植彌加藤造園の無鄰庵案内



学校現場でも働き方改革！

依藤光代：

都市・地域プランニンググループ



教育現場での働き方について、現状と対策を熱心に話し合う小・中学校の先生方

教育現場にて「先生たちが忙しすぎる」という問題が指摘されています。

先生たちの働き方を改善するため、生駒市教育委員会からの委託で、市内の小・中学校の教職員を対象としたワークショップを8月に開催しました。3回のプログラムでは、リアルな日常を振り返って問題を抽出し、また対話と共感を重視して学校を超えた先生たちのネットワークづくりも行いました。

現場の実態を整理したところ、仕事の根幹である教材研究の時間が十分取れないなど、深刻な状況が浮かび上がりました。さらに、忙しいため先生の間で情報共有が少なく、コミュニケーションがあまりないため、組織内で連携・協調して状況を改善していくためには、先生間の関係性を整える

ることから始める必要があると分かりました。

先生たちが抱えている仕事を棚下ろしして、見直しをしてみました。見直す余地があると判断されたのは、まず教員免許がなくてもできる作業（パソコンの保守など）で、教員以外の手にゆだねることを議論しました。第二に書類作成や成績処理などで、書類形式の見直しやパソコンの上手な活用、学校を超えたノウハウの共有化などで、効率化できそうな工夫が提案されました。第三に現場での意識に関して、会議時間を短縮するように心掛ける、率先して帰宅することをめざすなど、すぐに取組みそうなアイデアも出てきました。一方、見直しが特に難しいと判断されたのは、保護者対応や生徒指導で、「時間をかけて対策を考える必要がある」ということになりました。

今後は、取り組んでいきたい対策を各校に持ち帰って、周りの先生を巻き込みながら改革の気運を醸成していくことになりました。並行して、仕組み等に関わることは教育委員会が設置する会議で検討されています。

次の時代の担い手を育てる教育現場の先生たちだからこそ、希望のある環境で前向きに働き続けてほしいと、心から応援しています。

笠置町のチャレンジ。“ヘルププロモーション！”で関係人口をつくろう！

廣部出：

公共マネジメントグループ

京都府の最南端に位置し、府内でもっとも小さなまち笠置町。人口も日本で2番目に少ないまちです。

古くから修験道場・信仰の対象となってきた笠置山に始まって、魅力資源はぎっしり。山頂にある古刹笠置寺には、日本で最大最古といわれる弥勒大磨崖仏があります。麓には、天然わかさぎ温泉笠置いこいの館があり、キャンプ場やカヌー、自然岩でのロッククライミング（映画「笠置 ROCK！」をどうぞ）。さらにはご当地鍋フェスタ「鍋1グランプリ」などなど。

さてしかし。どんなにいいところがたくさんあっても人口は減ります。「笠置町人口ビジョン」によると、2015年の人口1392人が2030年には977人になる。まちの元気をつくっていくために、町ではこの間、地方創生の様々なチャレンジをされています。

JR駅周辺の整備や観光開発、特産品開発、サテライトオフィスの整備、笠置まちづくり会社の設立。そしてまちの真ん中「かさぎひろば」として、温泉施設のリニューアル、多世代交流施設「つむぎてらす」の整備……。

町内外の人と人のふれあいと交流、関係人口づくりに向けたハード面の整備を進めると並行して、町外のアクティブシニ

アの力を引き込む取組もスタートしています。

その取組とは、笠置町の都市生活者等の高齢世代の活躍の場としての価値を発掘・創出し、住民が手伝ってほしいことをちゃんと掲げて、町への貢献を求めるタウンプロモーション（即ち、ヘルププロモーション）です。町外からきてくれる人には、「地域にとけ込む」を超えて「町民を新たな交流の輪に連れ出す」、いわば「おせっかい協働」を期待します。「笠置町までそうしょつちゅうは行けない」との声にお応えして、便利な都市部で笠置町のことを考えてもらう場所もご用意（予定）。アルパックでは、ワールドカフェとプロアクションカフェを組み合わせた座のしつらえなど、まちを元気にする対話を生み出していくお手伝いをしています。

まちづくりへの、日常的な「住民参加の輪」

「行動したい」「手伝ってほしい」の思いを集めるワールドカフェ

- 平生の住民懇談の場。熱度ある住民提案が生まれれば、プロアクションカフェへ。

笠置町を元気にする、アクティブシニアの「知恵の輪」

「いい知恵が出せる」「行動できる」の活力を集めるワールドカフェ

- 町内外のアクティブシニア中心の集まり。町を元気にする自主事業の実践提案をプロアクションカフェへ。

取組提案を実現につなげる「仲間」の輪

「実現しよう」「手伝おう」の仲間を集めるプロアクションカフェ

- まちづくり事業提案の場。それぞれの提案について、事業化・事業展開を支援するとともに仲間づくり等につなげる。

寺院境内の保育園を段階的に整備する



緑あふれる境内。右は梅檀の木。

境内には多くの建物があり、それらの整理と境内全体の方針を考える必要があります。引き続きお手伝いします。

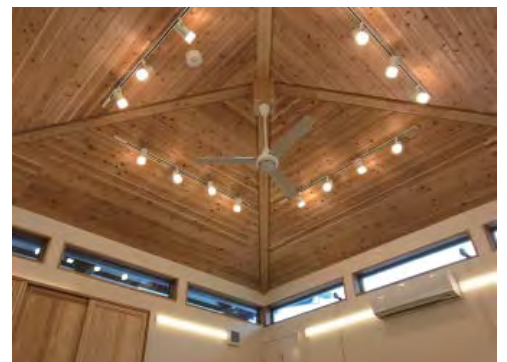
元は寺院境内で始められた保育事業のため、園舎と乳児棟が離れていて動線的に不便でした。また乳児棟は耐震性能も不足しています。さらに、学童保育を行っている昭和初期に建てられた観音堂は老朽化が著しく、対策が必要で

と、江戸時代創建の檀王法林寺と、その境内にだん王保育園があります。戦後まもなく仏堂を改造して保育事業を始められ、全国で初めて夜間保育園が認可された歴史ある保育園です。アルパック創業者の三輪泰司が創業前の昭和42年に現在の乳児棟を設計、昭和45年には保育園園舎を設計しました。平成21年の保育園園舎の耐震診断、補強設計を皮切りに再びお手伝いをしています。

三浦健史：

建築プランニング・デザイングループ

アルパック創業の頃からお付き合いのある保育園で、園舎の段階的な整備事業をお手伝いしています。



多目的保育棟の内部。お堂のイメージ。

整備方針として保育園機能を保育園園舎の近くにまとめる方針のもと、この10月に学童保育のための多目的保育棟が完成しました。木造平屋40平方メートル、本堂の横に建つことから方形の小さなお堂のイメージです。床、腰壁、天井に木を使う暖かい雰囲気としています。断熱性能をかなり高めており、吹付断熱材を厚くした上に通気も取っているため、この夏の建物内は涼しいほどでした。現在は、新しい乳児棟を建てる準備をしています。

保育園、寺院境内全体の構想は、次の30年のためのマスタープランでもあります。今後の少子高齢化に直面する保育事業や地域福祉への思いなど、いろいろな要素について施主と検討してきました。境内ではまだ事業が続きます。引き続きお手伝いしていきます。

花粉症をはじめとしたアレルギー症状を緩和する“N-PLUS (N プラス)” 技術をご存じでしょうか。

中川貴美子：

サスティナビリティマネジメントグループ

毎年この時期になると、次年度の花粉飛散予測が発表されます。第一報では、2019年は、全国的に「例年並み」か「やや多い」と発表されています。花粉症でお悩みの方は、対策をどうしようかとそろそろ悩みはじめている頃かもしれません。

毎年、色んな花粉症対策が目見えますが、昨年度、花粉症を緩和するNプラス技術のビジネス戦略検討、普及をお手伝いする機会がありました。その一年の検討の結果、2018年9月21日に愛媛県松山市にてNプラス協議会を設立いたしましたのでご紹介いたします。

Nプラスですが、「N (エヌ)」はノビレチンの頭文字 N を、「PLUS (プラス)」はβ-ラクトグロブリンとの増強効果を表します。愛媛大学、伊方サービス株式会社、四国乳業株式会社との共同研究によるもので、柑橘類の果皮に含まれる「ノビレチン」と乳製品に含まれる「β-ラクトグロブリン」、この自然

由来の2つの成分を同時摂取することで、より強いアレルギー抑制効果が出ることを発見された技術です。



N プラス協議会ホームページ



N プラス協議会での柑橘成分の機能性を活用した商品開発に関する講演 (愛媛大学大学院菅原教授 / 協議会会長)

N プラス協議会は、産・官・学の連携により、今後、この研究成果を活用した特許「抗アレルギー用経口組成物 (以下Nプラス)」の調査研究、情報交換及び普及・広報等を推進し、Nプラスのブランド化とその浸透を図り、Nプラスを活用した商品の効果・効能により消費者の健康の維持・増進に寄与することを目的に設立いたしました。

当社も一会員として普及に寄与していければと思っております。現在、Nプラスの技術は、ヨーグルトドリンクやサプリメント、お総菜などさまざまな商品に展開されています。Nプラス協議会では、本発明の製品化を目指して頂けるパートナー企業を引き続き募集しています。技術、商品ともにご関心のある方はぜひ、ホームページをご覧ください。ただそれだけでは、柑橘類の果皮に含まれる「ノビレチン」と乳製品に含まれる「β-ラクトグロブリン」、この自然

京都市動物園では今。

原田稔：

建築プランニング・デザイングループ

京都市動物園は明治36年に上野動物園に次いで全国で2番目の動物園として開園しました。

平成20年に京都大学と「野生動物の保全に関する教育・研究を行う連携協定」を締結。平成21年からは新たな魅力づくりのための再整備が進められ、平成25年には、園内に「生き物・学び・研究センター」が設置され、平成27年には学術研究・環境教育機関が併設された新たな都市型動物園としてグランドオープンを迎えています。現在、アルバックでは、これからの京都市動物園の指針となる、新たな「京都市動物園構想」の策定支援と残されたサル島及び類人猿舎の再整備計画に関わっています。

ところで、「環境エンリッチメント」という言葉を聞いたことがありますか？聞き慣れない言葉ですが、今、動物園の運営にとって最も大切とされていることのひとつです。「本来の生息地とは異なる環境で暮らす」野生動物たち。彼らにとって動物園は、狭くて変化が無く退屈な場所になりがちです。そこで、こうした飼育環境を少しでも豊かで充実したものにしようという試みが「環境エンリッチメント」です。

京都市動物園でも再整備により、コンクリート張りのグラウンドを土に替え、緑を増や



タッチパネルで数字の勉強中。チンパンジーも勉強より遊びの方が楽しいようです。

し、自然に近い環境を創出すると共に、遊びや勉強、餌のやり方など、動物たちが退屈しない飼育環境となるように様々な工夫がなされています。また、自然に近い環境の中で生き生きと暮らす動物たちの姿を見てもいい、それにより環境や種の保存の重要性に関心を持ってもらうこと。動物園の役割も大きく変わってきています。そして今回の計画では、対象となるチンパンジーやマンドリルの知性が高く、感情や個性を人間と同じように表現することから、それぞれの個体の特性をできるだけ自然な姿で見てもらえるように、その個性が発揮できる飼育環境の整備をめざしています。

みなさんも一度、身近な動物園に足を運んでみてはいかがでしょうか、子どもの時とは違った新たな発見がきっとあるはずです。

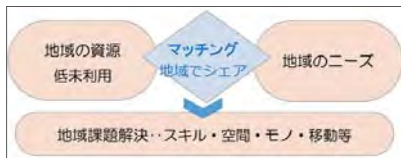
犬山城下町での駐車場シェアへの取り組み

安藤謙：

名古屋事務所



犬山城下町風景（犬山市提供）



シェアリングエコノミーのイメージ

愛知県犬山市において総務省シェアリングエコノミーのモデル地区として低未利用地有効活用による観光地での渋滞解消に取り組んでいます。

現在、犬山市は、県内有数の観光地として賑わいをみせています。明治村を始め民間鉄道会社の観光施設が立地しています。が、中心部の城下町地区の賑わいはここ10年程のことです。「歴まち」「景観」などの政策とTMOの店舗誘致、民間連携による成果ですが、その一方で土日の道路渋滞がさらに増えています。その対策としてシェアリングエコノミーにより駐車場を確保し、渋滞解消に役立てようとしたのがこのモデル事業です。

「シェアリングエコノミー」は、「空間」「モノ」「移動」「スキル」「お金」など「活用可能な資産等をネット上でマッチングし他の人にも利用可能とする経済活動」と定義しています。今年度は15団体が対象です。

犬山市は、今回、事業者や個人の駐車場、未利用地を来訪者に開放・活用しようとしています。仕組みは、市観光協会が中間組織としてコーディネートやPR・研修を行い、土地所有者と利用者のネット上のマッチングは軒先株式会社が行うことになっています。土地所有者はスペース提供のみで利用料金が入るほか、軒先株式会社、市観光協会も歩合収入を得るモデルです。利用者は事前予約が可能で、キャッシュレスのクレジットカード決済となり、駐車場探しの交通が回避されます。これは同時に身元保証にもなり、相互に安心感をもたらします。

しかし、室町後期の町割が残る犬山では土地の所有形態が複雑で、利用への所有者間合意も容易ではありません。公的支援による信頼確保、住宅地内への進入抵抗、近隣関係等配慮事項も多くあります。シェアリングエコノミー伝道師の石崎方規氏のコーディネートのもと、私たちは需要・ニーズ整理、とりまとめをお手伝いしています。

シェアリングエコノミーは、駐車場のほか自転車、車、スキル等々、今後様々な面で活用が広がる可能性を持ちますが、地域住民の意識変化、税制など、追いついていくべき要素も残されているようです。

オープンハウスロンドン 2018 と最近の「バルセロナ・モデル」～ロンドン編



中塚一：
地域再生デザイングループ

オープンハウスロンドン（以下「OHL」）と新たに様々な都市戦略が展開されているバルセロナに、大阪の生きた建築ミュージアムフェスティバル（以下「イケフェス」）実行委員会や船場倶楽部の方々と訪れましたので、2回に渡って報告します。

■事務局メンバー2名、ボランティア約千名で運営されるOHL

1992年に始まったOHLは、26回目を迎え、今年は9月22日～23日に開催されました。市内約800件の建築物を無料で一般開放し、国内外より約25万人の方々が訪れるビックイベントです。都市及び建築物の魅力が市民にもっと知って欲しいという取組は、ニューヨークをはじめ世界30数都市に広がっています。

今回は、事前にガイドマップを入手し、ホームページやスマホ対応のアプリもダウンロードし、事前準備していききましたが、多数の建築物、慣れない都市でのまち歩き、ロンドンらしい小雨、さらに人気の建築物での入場制限（横文彦氏のアガ・カーン・センターは2日共、直前で入場できず）など、到底2日ではお目当ての建築物が全て見学できない状況でした（見学できたのは2日で8件）。

今回の視察は、イケフェスをより魅力的にいくために、OHLでは実際どのような運営がされているかを現場で体験しようという主旨でした。一番感激したのは、沢山の老若男女のボランティアの方々のおかげ

い対応と、一般開放した建築物の内部の紹介において、社員の方々に由る企業への深い愛着と誇りを感じた点です。また、テロ対策のため出入口でのチェックが厳しく、空港の手荷物検査の機械のレンタルや爆発物等探知犬を雇っている企業もありました。これは今後東京オリンピックや誘致中の大阪万博などを開催する場合に、配慮すべき重要な視点であると感じました。

個人的に印象に残ったのは、奇しくも私たちの事務所と同じ設立51年となるイギリスを代表するフォスター+パートナーの設計事務所を見学した事です。テムズ川沿いの洗練された事務所では、世界のビックプロジェクトが生まれるクリエイティブなオフィス環境を案内いただくと共に、所員の方々による子ども向けのワークショップを開催していたのが印象的でした。

■同時開催のロンドン・デザイン・フェスティバル

9月15～23日にかけて、同時開催されていたロンドン・デザイン・フェ



沢山のボランティアと企業の社員の方々による運営



フォスター+パートナーの事務所



カムデンマーケットの運河を活かした船着き場

スティバルでも新しい発見が数多くありました。インスタレーションの展示や、トレードショー・ワークショップなどの開催、宿泊したホテル周辺の空き店舗がギャラリーや小さなパーティー会場になっているなど、「デザイン」や「建築」をキーワードに都市全体が新しい産業を創造しようという活気づいていました（私も夜な夜な放浪癖が再発）。

■テムズ川南岸のサウスバンク地区が、クールなクリエイティブゾーンに变身！

恒久的な都市戦略としては、テムズ川南岸のサウスバンク地区が大きく変化していました。旧発電所を現代アート美術館にリノベーションしたテートモダン、ロイヤル・フェスティバル・ホールなどの複合文化施設のサウスバンクセンター、大観覧車のロンドン・アイ、ミレニアムブリッジやバックヤードツアーのシェアイクスピアグループ座、オシャレなロンドン市役所など、見所満載、遊歩道沿いの景観は本当に創造性に溢れ魅力的でした。また、美術館内の

カフェがクラブになっていたりと、シティホール吹き抜け部分がギャラリーになったり、様々な場所が単一機能ではなく複合的に利用されていました。

■荒れた既成市街地が、ドラッグや空き店舗対策に取り組みで一大観光地に

ロンドン北部のカムデンタウンでは、ドラッグの売買等が日常的に行われていた既成市街地を、官民連携による防犯活動や空き店舗対策、ストリートと拠点となるマーケット、運河の整備等により今最もホットな地区へと再生していました。

「大きな費用を書けなくても、BID（エリアマネジメント）組織に価値があることを示せた」（ピッキースリ氏）の言葉のとおり、空き地や空き家を活用し、クリエイティブなスタートアップ企業へのシェア・オフィスの提供、テストマーケットを目的としたポップ・アップ・ストアの誘致、職業研修のためのイベントスペースの提供、そして若者の街らしくアーティストへの賞「Camden Inspire Awards」の創設により、「コミュニティに留まらず、ロンドン全体に新たな価値を生み出すことを意識した事業を展開していました」。

さらに周辺のBIDと連携し、中小企業のスケールアップを育成する複合ビジネスクラスターや廃線鉄道の高架を活用したカムデンハイライン構想など、新しいロンドンのチャレンジが益々広がっています。



過去に思いを馳せることと、生活の記録を残すこと

稲垣和哉

都市・地域プランニンググループ

研修旅行で軍艦島へ

9月の末、都市・地域プランニンググループで長崎へ研修旅行に行ってきました。今回の旅のメインは、みなさんご存知の「軍艦島」です。研修に先立ち、長年軍艦島の調査・研究をされていた片寄俊秀先生からレクチャーを受け、一同万全の状態で長崎へ向かいました。

過去へ思いを馳せることの難しさ

当日、島を案内してくださったのは、元島民の方でした。当時の生活の様子や、観光地化されていくふるさとの思いを熱く語っておられたのが印象的でした。

同じ空間に立ち、語りに耳を傾け、かつての生活が記録された写真や目の前に広がる廃墟を手掛かりに、当時の生活に思いを馳せました。正直なところ、遠い出来事のように感じられ、なかなか実感を持つことは出来ませんでした。しかし、過去へ思いを馳せ、その場所を理解しようとするその時間はとても大事なものだと思います。



今回の旅の軌跡です。1週間後に見てもあまり面白くないです。5年後に見たら、そういえば、こんなところに行ったなと思い、面白くなります。10年後、50年後には驚きの記録になり、たぶんとても面白いです。



とても良い天気でした。本当に軍艦のような姿をしています。

日々の生活の記録を残すこと

話は少し変わりますが、私は日々、自分の生活の記録をとっています。いわゆる「セルフ・トラッキング」と呼ばれるもので、何を記録するかは人によって異なり、その種類も多岐にわたります。私はその1つとして、GPS ロガーを常に携帯し、移動の記録を残しています(今年で6年目になります)。

その記録はただの数字の羅列でしかありませんが、振り返り、思い出したらそれは思い出に変わります。いつか振り返るため、思い出するために日々記録を残しています。

軍艦島での軌跡

今回の移動の記録を振り返ってみると、1本1本の軌跡を手掛かりに、その時の会話や風景を思い出すことが出来ます。そのような自分の記録を通して、改めて軍艦島を見ると、あの遠く感じたことも、不思議と身近なものに感じられます。

いかに自分事として消化していくか、自分と他人の思い出に接点を見出していくか、それが場所への理解を深めていくのだと思いました。

平成30年度全社研修会『ネクスト50年を展望した徹底議論』を開催しました

畑中直樹

全社研修等研修委員会担当

さる9月1～2日に、全社研修会を開催しました。今年度は、昨年度に創業50周年を迎えたことを踏まえて『ネクスト50年を展望した徹底議論』をテーマに、琵琶湖畔で久しぶりに1泊2日で開催しました。初日は、蓑原敬先生(都市計画家：蓑原敬事務所代表)のご講演に始まり、事前にUnder45で議論したネクスト50年についてのチーム発表と意見交換、10年勤続表彰及びアルバック賞表彰、夕食をはさんで深夜まで徹底議論し、2日目は、朝食前の早朝のヨガに始まり、徹底議論の続きをおこないました。議論の内容は、Under45を中心に再度議論し、年内にとりまとめる予定です。



全社研修会は、各グループからの中堅・若手で構成する研修委員会で企画・運営をしています。



近況 & イベントのお知らせ

東京事務所が移転いたしました

堀口浩司

取締役副社長（東京事務所長）

東京事務所は11月下旬に千代田区九段南から区内の内神田に移転いたしました。東京事務所は、京都・大阪の事務所とは若干機能が異なり、東京在住の所員の仕事の場としての役割だけでなく、京都・大阪・名古屋の職員の出張所や関東での営業拠点でもあります。東京では他事務所同様、東京、埼玉、神奈川県下の業務を行うのと同様に、国の業務も行い、中央官庁の情報収集にも取り組んでいます。

従前のオフィスは靖国神社や複数の大学に近く、落ち着いた執務環境でしたが、関西からの往来には不便な場所でした。東京では関西のスタッフと連携することで重層的な体制を組み相互に技術的な向上を図っています。そのため他事務所の職員の為のフリースペースの確保や会議機能の充実が不可欠となり、執務スペースや鉄道網からのアクセスを改善すべく事務所移転を行いました。

東京の同業者は東京に居ながら全国各地の仕事をしています。当社も関西に拠点がありつつも、全国の業務に関わることが増えています。今回の移転により、関東と中部・関西の往来が活発化し、これ

まで以上に質の高い仕事ができる環境を整えたいと思います。

<新住所>

〒101-0047

東京都千代田区内神田 1-15-7 ユニゾ内神田 1 丁目ビル 4F

TEL : 03-5244-5132 FAX : 03-6273-7715



最寄り駅：

地下鉄丸ノ内線淡路駅・新宿線小川町駅 徒歩5分

JR 神田駅 徒歩6分

web サイトをリニューアルしました

坂井信行

メディア委員会

このたび、アルパックのwebサイトを全面リニューアルしました。従来のサイトに対しては、コンテンツはそれなりにあるけれど、どこに何があるのかわかりにくいという声がありました。そこで、今回のリニューアルではコンテンツを検索しやすくとともに、より充実した情報をタイムリーにお伝えできるよう、構造から根本的に見直しました。

コンテンツの大きな構成としては、レターズアルパックの記事、旬な業務の紹介、イベントなどの情報、会社やグループの紹介などです。また、スタッ

フが簡単に更新できるように管理用のインターフェイスも用意しました。これにより情報発信のための強力なツールに生まれ変わりました。

ツールはあるのにコンテンツはさっぱり、という状況にならないよう、本誌レターズアルパックとともに有効に活用していきたいと考えています。リニューアルされたwebサイトを是非一度ご覧ください。

<https://www.arpak.co.jp/>





遠く海が見え緑も多い

橋本晋輔：
都市・地域プランニンググループま
ち
か
ど

坂のまち長崎を訪ねて 傾斜地での暮らしから考える

長崎と言えば「坂のまち」、傾斜地に広がる独特のまちなみや、そこから生まれる夜景など、長崎の坂は多くの人を惹きつけ魅了しています。

坂のまちで暮らしている人々はどうのような思いなのでしょう。いつも坂のまちに行くたびに、高齢になっても暮らし続けることができるのかなど色々気になります。長崎にはその坂のまちでの暮らしを支える「あるもの」があると聞いて見に行ってみました。

訪れたのは長崎市立山という、

最寄の路面電車の駅から歩いて10分程度の地区です。平地の市街地から連続して広がる斜面地にある住宅地で、下の方は車が入ることができない道路がありますが、途中からは歩道（というか階段）がなく、歩いてしかアクセスできない住宅がたくさんあります。ちょうど引越しの風景を見たのですが、引越したところまで荷物を背負子のようなもので背負って運搬するという過酷な作業をしていました。上の方にあがってみると、緑が多く、景色も抜群、斜面の関係で道も入り組んでおり、まちとしてはとても魅力が感じられます。一方で、空き家、空き地も多く見られ、斜面地での生活の難しさが目に見えてよく分かりました。

道路が途切れる場所に目当てのものがありませんでした。それは小さなモノレールのような乗り物で、正式には「斜面移送システム」とい

写真：上 ところどころに空地が広がる
下 斜面移送システム「さくら号」

う名前です。地域の高齢者や妊婦さんなどが斜面地において生活できるように市が設置した公共の交通手段で、対象となる地域の方は無料で乗れるようになっています。実はこの交通手段、管理運営の一部は地域住民が担っているそうです。人口減少の中で、都市基盤が十分に整っていない場所で暮らし続けるということは、住民側にとっても覚悟が問われる時代になっているということです。一方で地域に魅力があり、地域を愛し活動する人々がいるところでは、多少不便であっても暮らし続けられるという事例のような気がします。全国的にコンパクトなまちづくりが進められています、具体的にどのように進めるのか、ニュータウンも含めた斜面地での取り組みに何かヒントが隠れているのではないかと感じました。



「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates・Kyoto
<http://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四條通高倉西入立売西町82

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F

TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所 〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F

TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所 〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 ユニゾ内神田1丁目ビル4F

TEL(03)5244-5132 FAX(03)6273-7715

九州事務所 〒810-0802 (株)よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

ホーチミン 0908.CJ Building.2-4-6 Le Thanh Ton street. District 1 HCMC.Vietnam
(ベトナム)

TEL+84(028)6255-6732

この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。